



# 行為の代数学

スベンサー・ブラウンの『形式の法則』(青土社)



大澤真幸=著「行為の代数学」(青土社)

論理学や数字のような、形式化されたシステムでは、たとえ一箇所に矛盾が現れただけでも、全体が汚染されて、使いものにならなくなってしまう。そこで、自己言及のような怪しげなループは、システムから放逐(はきぞ)してしまおう。ラッセルの階型理論も、こういう作戦だった。ラッセルがヘーゲル流の弁証法を攻撃したのも、システムのなかに矛盾(=非論理)を持ちこむことになるからだ。

ところが、ラッセル晩年の弟子、スベンサー・ブラウンは、自己言及の問題を、劇的なかたちで再発掘した。『形式の法則』(朝日出版社)が、それである。この仕事は、いったん忘れられかけたが、オートポイエーシス(自己生成)がブームとなり、ヴァレラやルーマンもこの書を参照に掲げるにおよんで、またがぜん注目を集めている。

\*

『行為の代数学』はこの、『形式の法則』についての解題である。

社会学や社会システム論の分野では、最近、「自己組織」がホットなテーマとなっている。たとえば、アンチ・コントロールの立場から、社会のリフレクシヴ(自己反省)モデルを唱える今田高俊氏の仕事などが、評判をよんでいる(『自己組織性』・創文社)。『行為の代数学』は、解題のかたちをかりて、このテーマに、新しい角度から大胆な接近をはかっている。

ところで『行為の代数学』は、よい本である。手にとって数日、いつになく嬉しかった。

「よい本」の条件は、①自己包括的(ほかの本を見ないでも、その本だけでいちおう完結した世界になっている)、②独創的(ほかの本には絶対書いてないことが書いてある)なことだと思ふ。しかも、③刺戟的(発想が洞察にあふれていて、その先を自分でも考えたくなる)なら申し分ない。『行為の代数学』は、この三拍子がそろっているから、じつに「よい本」なのだ。

とくによい点は、原著の解説にとどまらず、スベンサー・ブラウンにかこつけて、自分の言いたいことを、かまわずどんどん言っているところだ。『形式の法則』は、かなりかつちりしたフォーマルな書物だが、そのフォーマルでない含意(数式から汲みとるべき部分)を、十二分にひきだしているあたり、

並々でない(もちろん、フォーマルな部分の紹介も、きわめて的確である)。

\*

そこで、『行為の代数学』を批評するに先立ち、まず、スベンサー・ブラウンの仕事がどんなものか、ひと通り押さえておこう。

## 論理学と代数学

スベンサー・ブラウンの『形式の法則』の頁をめくれば、知っている人ならだれでも、ヴィトゲンシュタイン(の特に『論理哲学論考』)と似ているなあ、と思うだろう。時代こそ違え、二人ともラッセル門下の才人である。そしてなにより、その精神に、相通するものがある。

私は、ヴィトゲンシュタインをだしにして、これまでいろいろ仕事をしたので、ここでもとりあえず彼を補助線にして、スベンサー・ブラウンの仕事の特徴を理解するのが早道だと思ふ。

で、二人はじゃあどこがいちばん違うのか、と考えてみると、こう言えそうだ。(前期の)ヴィトゲンシュタインの仕事は論理学だが、スベンサー・ブラウンの仕事は代数学である、と。

論理学は、リアル・ワールドなり、数字の体系なり、とにかくその外に完結したひとつの世界があると前提する。そのうえ

で、その世界を、正しく記述することを考える。「正しく」とは、使っている記号が、その世界の構造をちょうど反映していることを意味する。これが、ヴィトゲンシュタインの言う論理学だ。

これに対して、代数学には、外などない。それ自体が完結した世界である。この世界は抽象的なもので、具体的な内容を与えるには、それをまるごと、リアル・ワールドと読み換えるしかない。その場合にかぎって、それがたとえば、社会学になつたりする。

『行為の代数学』も、このような読み換え(解釈)によって成り立っている。

\*

この違いは、二人の書物のあり方にも反映している。

ヴィトゲンシュタインの『論理哲学論考』は、われわれ誰もが生きているこの世界(リアル・ワールド)についての書物である。どうしてこの世界のことを考えられるのかを、この世界を前提にして考える。それゆえこの書物のキーワードは、「同型写像」である。(後期の)ヴィトゲンシュタインは、多少様子が違うが、それでも、この世界を前提にしている点は変わりない。『哲学探究』はそのまま、世界を示す書物になっている。

いっぽう、スベンサー・ブラウンの『形式の法則』は、宇宙の根源的な分割(=判断)から始まる。それ自身が全体である

ことを、求めてやまない書物である。その外側に、何の世界も存在しなくてかまわない。だから、この書物のキーワードは、自己言及（スペンサー・ブラウンの用語では、「再参入 re-entry」）である。

このように、書物と世界の関係をどう考えるか、構想のおおもとが違っているので、たとえば同語反復（トートロジー）に對しても、二人の態度は異なっている。ヴァイトゲンシュタインは、リアル・ワールドについて何も述べない同語反復に、まったく価値を認めなかった。しかし、スペンサー・ブラウンは、aの二重否定は、必ずしももとのaと同じでない、と言う。aは、aでないものではない。こう主張することで、ある種の理解（世界のあり方に関する洞察）が生まれる可能性がある、と言う。

もっと重要なのは、矛盾や無限についての態度の違いだろう。つぎに、この点を考えてみる。

### 有限主義・対・弁証法

ヴァイトゲンシュタインはもともと、記号は世界を写像する、という考え方から出発した。論理実証主義に共通の発想である。彼によれば、世界は、出来事の集まりである。思考は、ちょうどそれと対応する、有限な記号列で表わせないと行けない。ここから彼は、厳密有限主義という立場に進んだ。人間が経験できるのは、有限の出来事である。無限については、思い

悩まなくていい、と言うのだ。

ヴァイトゲンシュタインも、矛盾を否定的なものとする点は、ラッセルや一般の論者と同じである。けれどもそれは、厳密に有限な範囲のことだ。無限集合では、 $\in \in + 1$  だったりするわけだが、彼はそんなことを、はなから思考可能でないとした。だからラッセルの階型理論のような、矛盾の解消法をまるきり必要としなかった。

いっぽう、スペンサー・ブラウンの記号観は、ソシユールと似ている。

クロス（囲い）から、すべてが始まる。何も無いところに、区別が生じ、その区別が指示作用の根拠となる。これはソシユールの、シーニュ（記号）の理論とそっくりだ。区別以前には、どんな実体もないのだから、クロスは自分自身にしか根拠を見つけられない。それを象徴するのが、「書かれざる囲い」（どんな囲いの外側にも必ずあると考えられる、目に見えない囲い）だ。指示作用は、この内部で確定する。

\*

その先『形式の法則』は、こんなふうに展開する。どんなクロスも、もつと大きなクロスに囲まれることで、その意味を確定する。ゆえに世界は、無限の規模を持ったクロスの集まりである。

ここから、自己指示形式（再参入）について考える必要が生ずる。（これは本質的に、 $\in \in + 1$ と同じかたちをしてい

る）。するとただちに、矛盾が生じる。クロスは、否定（ $\sim$ ）でない（ $\sim$ ）と理解できるので、自己指示形式では肯定と否定が等しいことになってしまう、真偽値が確定しなくなるからだ。

この矛盾を「非問題化」するために、「時間」が始まる。矛盾があるがゆえに、世界には時間も空間もあり、生成もある……こんなふうに、矛盾をしりぞけないで、積極的に世界のなかに位置づけるやり方は、ヘーゲルの弁証法にそっくりだ。

\*

スペンサー・ブラウンの、「指し示しの算法」は、形式化された代数学でありながら、矛盾をとりこんで、こんなふうに意外な方向に展開していく。大澤氏は、もうひとまわり大胆に、これを社会理論に読み換える。

読み換えのポイントを、順に押さえていくと――、まず、クロスを「行為」と読み換える。なぜなら、行為は有意義であって、そのつど世界の何ごとかを指し示すからである。

つぎに、無限の規模をもったクロスを「第三者の審級」と読み換える。この概念はなかなか理解しにくいだが、「他者」のことだと思えば、まあ当たらずといえども遠からずだろう。無限はけっして現前しないのに、個々の指示を意味あらしめている。同様に、他者も決して現前しないのに、個々の行為を意味あらしめるものだ。無限も他者も、その意味でここにある。無限も他者の存在も、矛盾である。そこから時間や振動が生

まれたが、これを、贈与ないしコミュニケーションと読み換える。内部と外部の反転を可能にするメカニズムを宿しているからだ。

自己指示は、このように、矛盾の生成と解消のドラマを生む。世界は、それが重層することで、複雑になっている。この重層を、こんどは、権力や制度の重層と読み換える。それによって、複雑な社会へむけてのダイナミズムを記述できるようになる。

こうやって、スペンサー・ブラウンの体系に潜りこみ、要所所で、奥行きのある社会学的含意を示して見せる。そんなふうに、この体系をたくみに自分の議論に書き換えていくのだ。

### 楽天的な、 あまりに楽天的な……??

大澤理論の全貌は、近著『身体の比較社会学』（勁草書房）を見てみないとわからない。『行為の代数学』からうかがえる範囲では、こんなことが言えるはずだ。

大澤理論とスペンサー・ブラウンとは、解釈によって結ばれている。言いかえると、スペンサー・ブラウンの体系は、そのままだと、全然社会学でない。

これは、ヴァイトゲンシュタインの場合と対照的だと思う。たとえば後期のヴァイトゲンシュタインは、言語ゲームのアイデアをふくらませているわけだが、これは解釈の余地もなく、それ

1989-8 3/14

110  
自体が、人間の社会活動のことである。言語ゲームを論ずると、そのまま社会を論ずることになる。

スベンサー＝ブラウンが社会理論になるのは、読み換えと解釈を通じてである。解釈は本来、多義的なもので、ひと通りに限らない。別な解釈も可能なはずだ。では、大澤理論はどこがひと味ちがうのだろう。

\*

大澤理論は、スベンサー＝ブラウンと無関係に、彼一流の社会学の直観によつて着想されたものだ。広松渉の現象学説や見田宗介の存立構造論を滋養分としている。その彼がたまたま、『形式の法則』に、これだと思つた。その運命的な出会いが、『行為の代数学』の生まれるきっかけになった。

大澤理論はもともと、スベンサー＝ブラウンの体系と同型なところがあるようだ。だから、その読み換えに説得性があるのだが、なにかスベンサー＝ブラウンの側に問題点があつた場合、それも一緒にかかえこむかたちになる。

そんな問題点として、こういうことが考えられよう。

\*

第一に、指し示しの算法がどんな空間で定義されているのか、という疑問。

スベンサー＝ブラウンの世界では、意味するもの／意味されるもの、の区別が最初にあつたりしない、指示作用がさき成り立ち、区別はそのあとやってくる。これはソシュールが描いた

記号の特性だ。『行為の代数学』は、この指示作用(クロス／囲い)を、行為と読み換えた。そうやって、指し示しの算法を、『行為の代数学』、すなわち社会学に変換した。

この読み換えでは、指し示しの算法の展開する世界が、ふた通りに解釈できる。世界は、一切の意味作用が生成していく現象的な地平(＝身体)ともとれるし、記号の流通する最大の圏域(＝社会)ともとれる。代数学が成立するのつべりした空間を、社会と読み換える関係上、このような両義性は避けがたい。けれども、この二つをそもそも区別しないとしたり、社会学としては問題だ。

もしかすると、これは、個人(身体)と社会を同型と見る、大澤理論の楽天的な前提を反映するのかもしれない。誤解を恐れずに言うと、彼の議論は、主観主義的に構成されている。そのため、他者の位置づけの収まりがわるい。

\*

第二に、無限のとり扱いについて。

無限は本来、有限の時間・空間のうちに現前しないはずで、「……(以下同様)」のような、特定できない記号のかたちで「理解」されるのがせいぜいだ。ところがスベンサー＝ブラウンは、無限にひとつの記号を与え、指し示しの算法を無限のうえに拡張した。自己言及を形式的に表現できるのも、こうした工夫のおかげである。

他者も定義上、この時間・空間のなかには現前しない。経験

できるのはせいぜい、他者の徴候にすぎない。だから『行為の代数学』が、無限を他者の象徴と見るのは、もつともだ。無限を知ること、他者を知ること、逆説であり矛盾である。けれどもそれは、この世界の成り立ちの根幹にそなわっているはずだ。大澤理論は、そのように世界を描きだす。

現前しないはずの他者が、自己に対して積極的な(≠規範としての)位置を占めるようになること。これが、「第三者の審級」らしい。要するに、他者の与える効果なのだが、では他者それ自体をどう語るのか。これは、手のつかない問題のように思つた。

(よく考えるとみると、クロスを『行為』と解釈し、スベンサー＝ブラウン代数の空間を『社会』と解釈することで、そもそも無理があつたのではないかと、という疑惑もわく。この疑問は根本的だが、なお検討を要す)。

\*

第三に、もつと素朴な疑問。スベンサー＝ブラウンではどうして、時間が唐突に、途中から導入されるのか。空間(指し示し、ないし行為)が先行し、時間(波動、ないし記憶)が後続する、という構図になっているが、むしろ初めは、時間とも空間ともつかない根源的な差異があつて、そこから時間・空間が分かれてくる、と考えたほうがすっきりするはずだ。

第四に、大澤理論と自己言及のループとの関係がよくわからない。すべて指し示しや行為が、自己言及をまねきよせるのな

ら、社会を描き出す大澤理論もやっぱり、自己言及に絡まれているはずだ。それにどう対処するのかわかりなかった。

……などなど。と、問題の種は残るが、それは楽しい宿題にしよう。

\*

『行為の代数学』の最大の功績は、自己言及に形式的な表現を与えたスベンサー＝ブラウンにいち早く注目して、自己言及を、社会理論のど真ん中にすえたことである。本書は、八〇年代後半を代表する社会理論の一冊として、ながく読みつがれるにちがいない。

(はしづめだいさきぶろう・社会学)

\* "An Amazing Labyrinth Named Self-Reference: The World of Spencer-Brown guided by Masachi Osawa", by Hashizume Daisaburo 1989 March